

献血って、ちょっと こわい感じがする



Q1. 献血の際に、病気がうつされるようなことはありませんか？

A 献血をするときに使われる針や血液のバッグなどは、献血者一人ごとに新しいものと交換されますので、ほかの献血者から^{かんえん}肝炎やエイズなどの病気がうつる心配は絶対にありません。

Q2. 献血で血液を抜いても体に影響は出ないのですか？

A 私たちの体内の血液量は、個人差がありますが、男性は体重の約8%、女性は約7%といわれています。体重60kgの男性では4800ml、体重50kgの女性では3500mlの血液量となります。

医学的には、通常は体内の血液量の15%以内（男性720ml、女性525ml）が失われても、身体上の問題はありません。

Q3. 高校生が献血しても、健康上の心配はないのですか？

献血の際には、血液の比重検査のほか、問診や血圧測定などの検査を行い、総合的に健康状態を判断してから献血の適否を決めています。

A また、わが国の1回の採血量は18歳未満であれば200mlだけです。これは諸外国の約半分であり、高校生であっても健康上問題はありません。2003年（平成15年）には延べ24万2千人（全体の4%）の高校生に献血に協力していただいております。

Q4. 400ml献血と成分献血を勧められるのはなぜですか？

400ml献血と成分献血については、量の確保という面ばかりではなく、輸血の安全性を高めるためにも必要となっているのです。

例えば、輸血を必要とする患者さんに800mlの輸血をする場合、200ml献血では、献血者4人分の血液が必要となりますが、400ml献血であれば献血者の2人分の血液で済みます。輸血を受ける患者さんにとって、なるべく少人数の献血者の血液を使用する方が未知の感染症や副作用などを減らすことができるのです。

A また、成分献血については、必要な成分だけを採血し、体の中で回復するのが遅い赤血球成分については献血者に返すので、献血をする人にとって体の負担を軽減させます。そして、成分献血からは、200ml献血による場合の5人以上の血小板製剤や血漿製剤^{けっしょう}をつくることのできるため、輸血によるウイルス感染やその他の危険性を5分の1以下に軽減することができます。

ただし、400ml献血と成分献血は、18歳未満はすることができません。18歳になってからチャレンジしてください。

